2　資産の説明

2．1　資産の詳細

本節では，資産の詳細について詳述する。

「（1）概要」では，各構成資産の歴史，空間構成・配置の特徴等を述べる。

「（2）主たる構成要素」では，各構成資産の主要な構成要素を説明する。保存状況は構成資産によって異なるものの，近世当時に建築され，本質的な価値を示す建造物が現存しており，それら建造物を「ア当初建造物」として説明する。次に，近世当時の建造物が現存しなくとも，発掘調査を行って地下遺構の保存状況を調査し，確認された地下遺構を保護することを原則としつつ，古文書や古写真といった諸記録をもとに近世当時の姿に復元した建造物がある。これらは構成資産の本質的な価値を補強する役割を果たしていることから，「イ復元建造物」として述べる。

さらに，咸宜園と豆田町については，復元されていなくとも地下遺構が良好に残されている建造物跡があることから，「ウ地下遺構が現存」する建造物についてとりあげる。

「（3）関連建造物」では，明治以降に建築されたものの，各構成資産の本質的な価値を補強する役割を果たす建造物について述べる。

※歴史的建造物を史料等を用いて過去の時代の姿に戻すことがあるが，この行為を「復原」または「復元」と呼んでいる。本書では，絵図や記録，または古写真等の典拠をもとに再現する行為について「復元」を統一して使用する。また，災害や経年劣化で損傷し失った部分を修理する場合は「修復」，その他，先進事例に倣う等の軽微な修理をする場合は，「整備」を用いる。

2．1．1　足利学校

指定名称　足利学校跡

保護・文化遺産の種類　記念物（史跡）

教育遺産の類型　官立（官営）学校

指定等により保護されている面積　18,179 ㎡

（1）概要

足利学校は,現存する日本最古の学校である。起源は，9 世紀から 13 世紀など諸説あるが，文献上その具体像が明確になるのは，応永 30(1423)年の『学校省行堂日用憲章』に学校の名が記され，関東管領の上杉憲実（のりざね）が，学田と書籍を寄進し学規を定めた頃からである。16 世紀中頃には宣教師フランシスコ・ザビエルが「日本国中最も大にして,最も有名な坂東の大学(原語ではアカデミア)」と記し，当時の日本屈指の学校として世界へ紹介している。律令制度の弱体化で京都の大学寮，勧学院，学問所が衰退す

写真 2-1　足利学校（方丈・南庭園苑池）

るなかで，古代以来の学問を近世へとつなぐ役割を果たすとともに，17 世紀半ばには大成殿（孔子堂）が建てられ，近世の学問教育の基盤となった。近世を通して，上杉憲実以来の漢籍等の蔵書を求めて，多くの文化人や学者がこの学校を訪れた。

足利学校の敷地はほぼ 15 世紀に定まった。**図 2-1** に示すように，近世になると全体は大きく東西に分かれ，西側を孔子廟区域，東側を学問所区域としている。学問所の敷地は，地域により東西ないし南北に分ける違いがあるが，足利学校では中国に始まり東アジア全域に広がった伝統的な東西役割を踏襲している。

足利学校に現存する最古の建築は，寛文８(1668)年に建築された大成殿および学校門であり，現存する日本最古の学校建造物を有する学校とされる。建築の配置と様式において近世学校建築と異なるが，それは，敷地内に方丈・庫裡・書院を配置するなどの禅宗寺院に由来するものである。

足利学校は明治初期に廃校となり，東半分は新たに小学校の敷地に利用されたが，平成２(1990)年に近世中期の姿に復元され現在の配置となる。堀と土塁に囲まれた構内の西側に南面して足利学校を象徴する大成殿があり，その南に杏壇門，学校門，入徳門がある。東側には復元された主要建造物の方丈・庫裡・書院がある。

構内南東隅の衆寮は４つの小部屋からなり，学徒の学習や生活の場であった。文庫は大成殿の東側次いで南東側にあったが，明治 15（1882）年頃に南西隅に新築した。

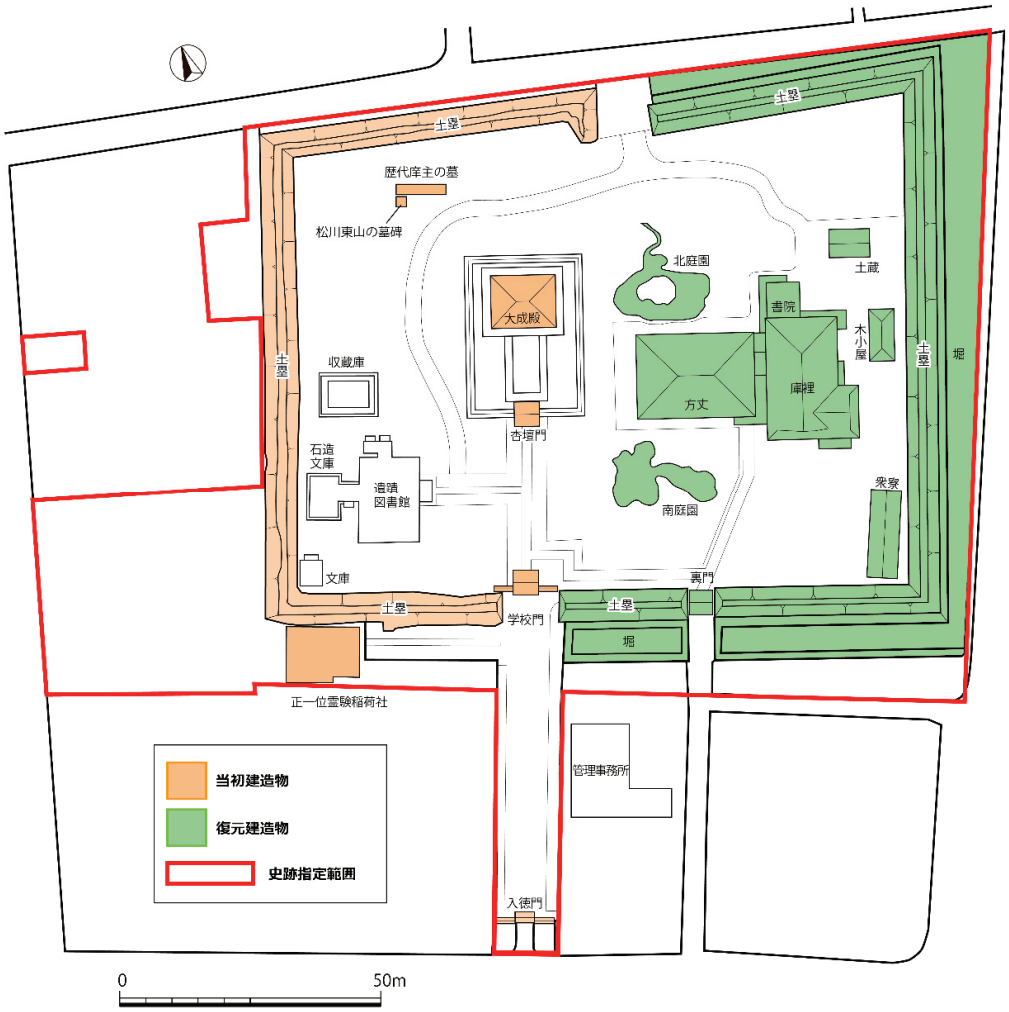

図 2-1　足利学校跡の指定範囲と主な構成要素

(2) 主たる構成要素　　※P42 表 2-1 参照

ア　当初建造物

① 入徳門

足利学校に入る最初の門で，南面して建つ。天保 2 (1831)年鑁阿寺安養院の火災により焼失し，天保 11 (1840) 年頃修築された。明治 42 (1909) 年に裏門を移築したと伝わる。「入徳」は朱熹の『大学朱熹章句』にある「子程子曰く，大学は孔氏の遺書にして，初学の徳に入るの門なり。」に由来し，入学するための最初に潜る門として位置づけられている。

写真 2-2　入徳門

額束に紀州藩第 11 代藩主徳川斉順の書とされる「入徳」の扁額を掲げる。左右に丸雁振瓦をのせた袖塀が付く。

② 学校門

入徳門と杏壇門の間に位置する門で，南面して建つ。学校門を潜ると堀と土塁で囲まれた学校敷地に入ることになることから，正門として位置づけられる。額束に「学校」の扁額を掲げる。扁額は当初，弘治元 (1555) 年に来日した中国明朝の使節蒋竜渓が揮毫した文字を使おうとしたが，当時の冠木門に掲げるには大きすぎたため，近世に入り，足利郡を支配していた土井利房の依頼により，『続本朝通鑑』の編集などに従事した儒学者狛高庸が縮模した。現在は扁額を保護するため，昭和 47(1972)年に複製が掛けられ，オリジナルの扁額は庫裏内部の展示ケースに収められている。左右に桟瓦葺の袖塀が付く。

写真 2-3　学校門

③ 杏壇門

大成殿（孔子堂）の門で，南面して建つ。「杏壇」とは孔子が弟子に学問を講じたところを指す。「杏壇」の扁額は紀州藩第 10 代藩主徳川治宝の書で，天保 14(1843)年に掲げられたものである。明治 25(1892)年の学校西方の火災により，屋根・及び門扉を焼失し，扁額も損傷著しいことから現在は庫裏内部の展示ケースに収められている。左右に本瓦葺

写真 2-4　杏壇門

の袖塀が付き，東袖塀中央に脇戸が開く。袖塀には大成殿を囲む形で築地塀が接続する。築地塀は寛文８(1668)年建設された。桟瓦葺，腰石垣積，東面には板唐戸２枚の潜戸が１か所開く。

④ 大成殿（孔子堂）

写真 2-5　大成殿（孔子堂）

孔子を祀る堂宇であり，足利学校の最も重要な建造物である。寺社奉行井上河内守正利の設計図により寛文８(1668)年に建立され，現存する国内最古の孔子堂である。一重裳階付の重層構造は中国の聖廟（曲阜の孔子廟）を模すが，桁行三間，梁間三間，寄棟造，本瓦葺という構造と意匠には，大陸由来の仏堂が日本建築として定着した先例との類似も見られ，伝統と格式を備えた造りとなっている。「大成殿」の扁額は京都の浄土宗大本山華頂山知恩院の尊超法親王の揮毫により天保６(1835)年に掲げられた。内部には，現存する国内最古の孔子坐像である天文４(1535)年制作の「孔子坐像」（栃木県指定文化財）及び，足利学校を創建したと伝えられる「小野篁坐像」（足利市重要文化財）が安置されている。また，毎年 11 月 23 日には孔子及びその弟子の遺徳を祀る「釋奠」（足利市重要文化財）が堂内で行われている。

⑤ 正一位霊験稲荷社

写真 2-6　正一位霊験稲荷社

天文 23（1554）年，足利学校の鎮守である稲荷大明神像が傷み，社殿も破損していたため，八幡神を合祀した新社殿が造立された。霊験あらたかで近世には近在の信仰を集め，祭礼も盛んで多くの人々が参詣した。明和７(1770)年，第 16 世庠主千渓元泉によって正一位霊験稲荷社と改められ，明和９（1772）年には，梅や竜などの彫刻が取り付けられた。明治 42（1909）年，現在の遺蹟図書館の位置から，南堀を埋立てた現在地に移設した。

⑥ 堀・土塁（西半分）

長方形の学校敷地西半分を囲繞する。近年の発掘調査によって，明治末から大正初期にかけての西側敷地拡張に伴い，西堀及び北堀北西部を埋め立て，その堀跡の上に西土塁・北土塁を築き直したことと，堀南西部を埋め立て，正一位霊験稲荷社を移築したことが確認された。学校門西側の南土塁は土塁の中では旧状をよく留める唯一の部分である。すべての堀は出土遺物から近世以前には造られていたと考えられ，数度

の浚渫を繰り返していることが確認された。

⑦ 歴代庠主の墓

大成殿の北側にあり，石列で区画された東西 11 メートル，南北 2.2 メートルの範囲の中に無縫塔などからなる歴代庠主（校長）の墓石が 20 基並ぶ。このうち，刻まれた名前から墓の主が明らかなものは，第 14 代から第 19 代まで，第 21 代，第 22 代の８名である。

写真 2-7　歴代庠主の墓

⑧ 松川東山の墓碑

歴代庠主の墓域の南西に接し，竹垣で区画された東西 4.95 メートル，南北 2.9 メートルの敷地中央に建つ。

松川東山は会津出身の漢学者。若くして江戸に出て漢学を学んだ後，京都に出て伊藤仁斎の古義堂に入門し，仁斎を終生の師と仰いだ。再び江戸に戻り私塾を開いたが，足利学校が衰退していることを聞き，友人らと足利に赴き再興を図るも，志半ばにして寛政６(1794)年に病没した。遺言により，寛政８(1796)年に墓碑が大成殿の側に建てられ，友人である太田錦城が碑文を書いた。

イ　復元建造物（平成２（1990）年復元）

明治６(1873)年に足利学校跡の敷地の一部が小学校（のち足利市立東小学校）になり，方丈などが取り壊された。校舎老朽化に伴い，昭和 56（1981）年に東小学校の移転が決まった。翌年，史跡内の発掘調査が始まり，その成果や寛政年間（1789～1801）の絵図面である「境内惣坪数並諸建立物絵図」などをもとに，平成２(1990)年に地下遺構を保護しながら，方丈，庫裡，講堂を含む建造物７棟と庭園を近世中期の姿に復元した。

① 方丈

講義，学習，様々な行事で使用された建造物で，禅宗寺院の方丈に従った構成をとる。座敷は東西３間，南北２間の６間に区切れ，中央北側に仏殿の間，西北側に尊牌の間（徳川歴代将軍の位牌を安置）が配される。仏殿の間，尊牌の間は板張りの床で，それ以外の間は畳敷きになっている。瓦葺正面唐破風造の玄関が庫裡との間に位置し，吹き抜けの北廊でも方丈とつながる。

写真 2-8　方丈内部

② 庫裡

庠主や学生の日常生活の場であり，カマドのある土間に板敷きの台所，畳敷きの４部屋があった。土間の南側に小物部屋，台所の東側に東下屋物置が位置する。東側・西側に榑縁が付く。土間上部のみ天井を張らず，小屋を表しとする。

③ 書院

書院は庠主の書斎兼応接間として利用され，庫裡から北に続き，北端に便所，東側に湯殿等が付属する。８畳２間の上の間，次の間を南北に並べ，西側に内縁，さらに東西に榑縁を付ける。

写真 2-9　書院

④ 衆寮

学生寮として使用されていた。現在残る絵図面等の資料から寛延２(1749)年にはその存在が認められるが，造営年代は不明である。平面は６畳間の前に土間を付けた寮室を４室並べる。

⑤ 木小屋

薪や農具などが置かれたほか，漬物などの食料品も保管された。現在残る絵図面などの資料から寛延２(1749)年にはその存在が認められるが，造営年代は不明である。

⑥ 土蔵

耐火建造物として貴重品などが保管された。現在残る絵図面などの資料から寛延２(1749)年にはその存在が認められるが，造営年代は不明である。

⑦ 裏門

学生や一般来校者の通用門として使用された。現在残る絵図面などの資料から寛延２(1749)年にはその存在が認められるが，造営年代は不明である。両脇にそれぞれ長さ 10 尺の袖塀を付設する。東側に潜戸がある。

⑧ 南庭園

方丈の南側に広がる築山泉水庭園である。発掘調査の結果，宝暦年間(1751～1764)頃の池の改修が認められたことから，作庭時期はさらに遡ると推定されるが，年代は不明である。池床は耐久性や遺構保護を考慮して粘土を張る。護岸は池床より水際までは玉石積み，その周囲は高麗芝を植生する。池尻は池の端部分から中央開渠へ水を流す排水溝までで，その間を玉石で護岸した幅 0.3ｍの排水溝が通る。築山は方丈から見て正面中央の池の南側に最も高い山を配し，その東側に一山を配し，西側に池を

囲む形で一山を配している。南築山の東の麓の井戸遺構の上に玉石を小口積に積み上げた井筒上に御影石の井桁がのる。

⑨ 北庭園

方丈の北側，書院の西側に位置する築山泉水庭園。奥向きの庭として南庭園より格式が高く，亀の形をした中島を配し，弁天を勧請した石祠を祀る。発掘調査の結果，宝暦年間（1751～1764）頃の池の改修が認められたことから，作庭時期はさらに遡ると推定されるが，年代は不明である。池の水深は 0.45～0.5ｍが標準で，遺構面が高いところで 0.2ｍ程度。池床は耐久性や遺構保護を考慮して粘土を張る。護岸は池床より水際までは玉石積み，その周辺は高麗芝を植生する。池尻は池の端部分から中央開渠へ水を流す排水溝までで，その間を玉石で護岸した幅 0.3ｍの排水溝が通る。築山は方丈から見て正面中央の池の北側に最も高い山を配し，その西と東側にそれぞれ一山を配している。

⑩ 堀・土塁（東半分）

学校敷地を囲繞する長方形の境界施設。平成２(1990)年に，発掘調査及び古絵図調査の成果に基づき復元した。

(3) 関連建造物

明治 36（1903）年，足利町による足利学校の保存事業の一環として，足利学校伝来の旧蔵書の保存を目的に史跡内に足利学校遺蹟図書館が発足し，大正４(1915)年に現在の建造物が完成した。遺蹟図書館で旧蔵書の整理が進められ,『仮名別目録』,『貴重書目録』,『足利学校遺跡沿革』,『足利学校遺蹟図書館古書分類目録』などが刊行・配布され，足利学校旧蔵書の評価を高めた。昭和 55（1980）年に栃木県立足利図書館が開館するまで公共図書館として活用された。遺蹟図書館には二つの書庫（文庫）がある。

また，旧蔵書を保管するために収蔵庫が建てられた。室内は収蔵室と前室を設け，収蔵室には足利学校旧蔵書の内，国宝などに指定されている貴重書，特別書約 1,400 冊が収蔵されている。

２．１．２　閑谷学校

指定名称　旧閑谷学校

保護・文化遺産の種類　記念物（特別史跡）

教育遺産の類型　郷校（郷学）

指定等により保護されている面積　38,327 ㎡

（1）概要

閑谷学校は，寛文 10(1670)年に設立された世界最古の庶民のための公立学校で，岡山藩主池田光政が，村や地域の運営にあたる指導者たちを養成する目的で設置した。

岡山藩士の津田永忠により整備が進められ，学房が寛文 12（1672）年に，講堂が延宝元（1673）年に，聖廟が延宝２(1674)年に建造され，光政の死後には長子綱政が学校の恒久化を目指して校内建造物の改築を行った。現在の閑谷学校の規模は 17 世紀末に整った。

写真 2-10　閑谷学校（講堂）

教育内容は基礎的な手習い・算用・素読から儒学の講釈まで幅広く，階層を超えて人々の共通の教養を広める役割を担った。武士や他地域の子弟も受け入れ，学校の教育や運営に庶民出身者を登用するなど，学びと教えの両面で開かれた学校であった。

閑谷学校の空間構成の特徴として，まず山あいの閑静な場所に立地する点が挙げられる。藩校等は藩の政治経済の中心地である城下に建てられる場合が多く，町の喧騒や敷地の制約を受け，良好な教育環境の確保は難しい場合が多かった。他方，閑谷学校は校名から連想する印象がその立地と合致し，現在なお建造物は静かな山間の地に良好に保存されている。津田永忠の案内でこの地を見分した光政は，「山水清閑，宜しく読書講学すべき地」と教育の場に相応しい環境として校地を定めた。山紫水明の地に身を置くことによって修養を深める思想は，儒学の普遍的な基本思想である。

現在も完成時の主要建築と配置がほぼ残り，堅牢な石塀で囲まれた敷地は四季の自然と調和する学びの場の理想を示している。

学びの場である講堂は現存する日本最古の学校講堂であり，宗教建築に準じた架構と意匠を意識しつつ，生きた学びの場として質の高い空間設計の工夫がなされ，近世初期の郷校唯一の作例として極めて貴重である。

講堂の東側には，高台に聖廟と閑谷神社を配し，特に孔子を祭る聖廟は敷地の東側に一段高く立地する。西には火除山を築き，出火しやすい日常空間（学房群）と儀式空間が隔離されていることから，往時の防火意識の高さが知られる。

光政を祀る芳烈祠（現閑谷神社）や光政の爪や髪を納めた椿山により，庶民教育の場という国替えなどで廃されやすい立場の学校を守る建造物配置としている。

学校施設として学房，講堂，聖廟という東アジアの儒教に基づく学校建築の一般的な建造物の種類を備える。講堂，聖廟，芳烈祠には上質な木材，石材，瓦が使用され，入念かつ周到な技術を投入しており，設計・施工・意匠の完成度が高い。

閑谷学校は,明治４(1871)年岡山藩の廃止によって閉校となるが,翌々明治６(1873)年には閑谷精舎として再興され，その後も閑谷黌（しずたにこう）・私立閑谷中学校・岡山県閑谷中学校等と移り変わり，近代以降の教育制度の大幅な改変後も，脈々とその学びの伝統は受け継がれた。また，聖廟では貞享３(1686)年に藩儒らによって孔子を祀る釈菜（せきさい）が実施され，現在でも祭祀が行われている。

図 2-2　閑谷学校の指定範囲と主な構成要素

(2)主たる構成要素　　※P43 表 2-2 参照

ア　当初建造物

① 講堂

写真 2-11　講堂(右)小斎（左）

敷地西側に所在し，広間式の講堂を中心にして，小斎・習芸斎及び飲室・文庫・公門が展開する。日本最古の学校講堂で，規模，構造ともに他に類を見ない。講堂は，桁行３間，梁行２間の身舎を広い庇で囲い，さらにその外縁に吹き放しの広縁を巡らせて，全体を桁行７間，梁行６間とする。身舎の外周に花頭窓を配し，南北面中央間に扉を開く。堂々たる建築架構は仏教建築に前例があり，講堂は僧侶の説教や経典講義の場であった。しかし，いわゆる教室となる建築の前例が乏しい時代にあって，広く等しく庶民の子弟が学ぶ空間の設計は容易ではなかった。内室は欅の丸柱で，柱や長押，床板等木部は全て拭漆塗りで仕上げており，学校内でも特に上質の建材が用いられている。

入母屋造の屋根は備前焼瓦で葺かれ，錣葺き二段の立面は美しい比例をとり，建築全体に堂々たる規模と落ち着きを与える。妻飾りを塗り込めるのも仏教建築との違いを意識した意匠である。野地板の丁寧な仕上げは谷間の風雨に対する耐久性を考慮した工夫であろう。講堂では毎月１と６の日に，教授役による四書（『大学』・『中庸』・『論語』・『孟子』）の講釈が行われ，儀式と講義，講読の場であった。

② 小斎

藩主が臨学した際に使用され，浴室と雪隠を置いている。数奇屋風の建造物で，小さな床の間が付属する。藩主の随行者のための施設は省かれ，小規模にして簡素である一方，建材には上質のものが用いられている。

③ 習芸斎及び飲室

写真 2-12　習芸斎（右）飲室（左）

講堂と比べて質素に作られ，松材が使用される。習芸斎は毎月３と８の日に読書師による五経や賢伝等の講釈に使用された。

付属する玄関は，小斎への藩主の御成玄関としての性格を持つ。飲室は休憩所であり，湯茶を喫することができた。生徒は飲室の出入り口から講堂を利用した。中央に炉が切られており，防火のため炭火以外での使用を禁止する文言が囲い石の上面に刻まれている。土間の片側には石造りの流しが設置されている。

④ 文庫

前室を付けた堅牢な２階建てで床板張り，化粧屋根裏である。閑谷学校で使用・収蔵する書物を収納していた。一番外側が両開きの土戸（つちど），次に片引きの土戸，さらに内側に竹格子戸となっており，３重の戸をたてる構造である。防湿・防火への厳重な意識がうかがえる建造物である。

⑤ 公門附左右練塀

講堂の南方に位置する。「御成門」とも呼び，藩主が臨学した際に通った門である。本柱の後ろに控柱を２本立てて切妻屋根をのせた薬医門の建造物で，石塀と同時期に設置された。普段は締め切っており，使われなかった。

⑥ 聖廟

孔子廟又は西御堂とも呼ばれる。大成殿は正方形をなしており，正面３間には各間に桟唐戸（さんからと）を入れ，東西側面には花頭窓（かとうまど）を置く。

写真 2-13　聖廟

儒学の祖である孔子の像が安置される最も重要な建造物であり，整備も建造物群の中では早期の貞享元(1684)年に行われた。東階・西階が中庭と大成殿を繋いでおり，聖廟が単独ではなく，複数の建造物が整然と配置されている点が特徴的である。中央軸線上に建造物が位置するのではなく，軸線を挟んで左右に２つの建造物が並び，それぞれに通路（東階・西階）を設ける点は，儒教の教えに基づく。備前焼の瓦が採用されており，床は亀甲型の黒燻の瓦塼が敷かれる。

⑦ 聖廟　厨屋（くりや），繁牲石（けいせいせき）

いずれも儒教の儀式を行うための施設である。厨屋は釈菜の際に祭壇へ供える供物を調理した場所で，内部は土間とし，北側と西側に棚を設ける。繁牲石は祭事の際に生贄の動物を供えるための石柱で，形式的な施設である。旧閑谷学校では現在でも，秋に釈菜が行われている。

⑧ 聖廟　文庫

西階の西にある建造物で，腰に低くなまこ瓦を貼る。両開きの土戸と片引きの土戸を立て，内部床は拭板張である。２段の書棚を設けている。

⑨ 聖廟　外門，練塀，石階

四脚門の外門は聖廟の正門で，軒内に那智黒石を敷きつめている。外門の左右から，聖廟を囲う練塀が設置されている。塀の高さは約 1.6ｍで，外門の南側には広庭から至る 19 級の石階が設置されている。

⑩ 校門（鶴鳴門）附左右練塀，石橋

別名「鶴鳴門」ともいう。石塀に開かれていた５つの門の中で最大で，聖廟の表門であるとともに，閑谷学校の正門である。中心となる切妻造の部分の左右に付属屋が配置される。花頭窓があり，屋根には鯱をのせ，中国風の建造物である。泮池にかかる附の石橋は，切石を用いた精巧な造りである。

⑪ 閑谷神社（旧閑谷学校芳烈祠）

津田永忠が閑谷学校の永続を願って，池田光政とその祖先を祀った建造物で，貞享３（1686）年に完成した。孔子を敬うように聖廟より一段低い敷地に小さく造られている。光政の諡をとって芳烈祠，又は東御堂とも呼ばれる。明治８(1875)年に県社として閑谷神社と名を改め，学校から独立した。このため，各建造物の名称も，本殿の他は，中庭から拝殿へ，階から幣殿へ改められている。

写真 2-14　閑谷神社

⑫ 閑谷神社　神庫（庫）

拝殿の西に建てられており，両開きの土戸と前室が設けられている。前室と庫室の境にも，両開きの土戸が建てられており，前室は瓦敷，庫室は板張りである。南面に高窓が設けられている。

⑬ 閑谷神社　中門（外門），練塀，石階

四脚門の中門から，閑谷神社を囲うように練塀が設置されている。備前焼瓦の瓦当部分には池田家の家紋である揚羽紋が用いられているが，使用されているのは閑谷神社の関連施設だけである。中門の南側には 13 級の石階が設置されている。

⑭ 石塀附飲室門

旧閑谷学校の建造物を取り囲む石築塀で，閑谷学校の正面にあたる南側の石塀では，主要建造物の前面に５棟の門を開いている。特に南側平坦地の石塀は切石を巧みに組み合わせ，断面はカドがとれたかまぼこ型になっている。基礎は地盤の状況に応じて地山の岩盤から直接積み上げるか，捨石を置いた上に築くなどしている。長さはかまぼこ型の石塀が 456ｍで，校地裏側にある丘陵中腹の斜面を利用してやや簡易に築造された部分等も含めると総延長が約 769ｍになる。元禄 14(1701)年に着工した。

写真 2-15　石塀

⑮ 火除山（ひよけやま）

講堂と学房の間に築かれた小丘である。学舎や学房（寄宿舎）からの出火が講堂等に及ばないようにするため，防火の目的で作られた。袖部には石垣が積まれ，火災発生時に樹木による類焼を防ぐため，上部には樹木がない。

写真 2-16　火除山

⑯ 泮池（はんち）

校門から約 50m 南，石塀と平行して一直線につくられた長方形の池である。天子の学校には四周に水を巡らすのに対し，諸侯の学校にはその半分の池を設けるという中国古代の制にならって設置された。岡山県立閑谷高等学校時代には運動場に使用するために大半が埋められていたものを，元の池に整備した。現在の石組みは大正期のものであるが，池の上に架かる石橋は近世当時のものである。

⑰ 椿山（つばきやま）

池田光政の遺髪・髭・爪・歯を納めた供養塚があり，その南一体には椿が植えられる。供養塚は椿谷又は御納所（ごなっしょ）とも呼ばれる。供養塚の背後を取り巻くように，曲線を描く精緻な石垣が積まれる。直径８ｍ，高さ２ｍの盛土は，碗を伏せたような半球形であり，その周囲を花崗岩の角柱で玉垣風に取り囲む。学校完成の翌年，元禄 15(1702)年に造営された。

写真 2-17　椿山

⑱ 黄葉亭（こうようてい）

閑谷学校の教授，武元君立（たけもとくんりゅう）が有吉行蔵（ありよしぎょうぞう）とともに遊息の場として設けた茶室。閑谷学校を訪れる文人を遇す施設でもあったと見られる。屋根は宝形造の茅葺で，室は四畳半で中央に炉を切り，南壁に円窓を設ける。

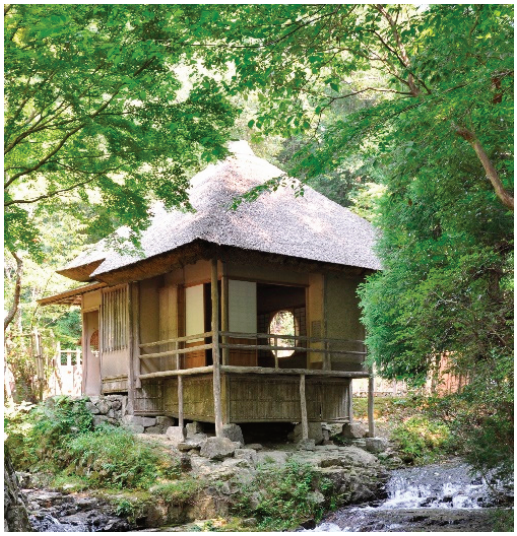

写真 2-18　黄葉亭

⑲ 石門

学校の南約１㎞のところにあり，２本の石柱が立つ。創建時の高さは 3.3ｍであったが，付近の造成によって，現在の高さは１ｍほどである。「閑谷学図」では石柱の両袖に柴垣が描かれている。

⑳ 津田永忠宅跡

閑谷学校創設にかかわった津田永忠の居宅跡。津田永忠は閑谷学校建造のため，閑谷の地に住むことを願い出て，寛文 13(1673)年に，岡山から閑谷に居を移した。閑谷学校から東へ 300ｍ程度に位置する。現在は水田となっており，石垣が残る。武元君立「閑谷学図」（重要文化財），頼山陽「黄葉亭記」（重要文化財）には２棟の藁屋が描かれており，文化・文政の頃までは何らかの建造物が建っていたとみられる。

イ　復元建造物

閑谷学校において，構成要素のなかに復元建造物は含まれていない。

(3)　関連建造物

岡山藩郷校としての閑谷学校は明治３(1870)年に閉鎖されたが，明治６(1873)年に閑谷精舎として再開した。その後，明治 37(1904)年に校名が私立中学閑谷黌に改められ，翌年に本館が落成した。寄棟造で桟瓦葺の木造２階建校舎で，昭和 39（1964）年に県立和気高等学校閑谷校舎が廃止されるまで使用された。

校舎は平成７(1995)年から閑谷学校資料館として活用され，閑谷学校伝来の資料を展示している。平成 13（2001）年に登録有形文化財に登録された。